

■ 編集だより

編集後記

東北楽天ゴールデンイーグルスが日本シリーズ優勝を果たした。所用でなかなかテレビ観戦もままならないが、最後の試合はハラハラしながら経過を追い、優勝が決まった際には東日本大震災以降のいろいろなことが蘇って胸が熱くなった。優勝後の監督、選手のコメントにも被災地の人々への想いが込められていて、この優勝が多く被災者を元気づけることは想像に難くない。野球に詳しい訳ではないが、数年前の楽天イーグルスの戦力ではまさかその3シーズン後に日本シリーズで優勝ということは想像できなかつた。戦力補強などの現実的な取り組みが功を奏したことを含め、被災地を拠点とする球団として何か大きな力がチームを突き動かしたということは間違いないことなのだろう。阪神・淡路大震災が起こった1995年に地元オリックス・ブルーウェーブがリーグ優勝を果たし、被災地域を勇気づけたということも印象深い記憶として思い起こされる。いずれにしても、この度のような出来事で地域が活気づくということは喜ばしいことである。

楽天イーグルスの監督、選手達は震災以降、被災した人々に自分たちに何ができるかを自問したという。被災地域での様々な活動に加えて、日本シリーズの優勝を成し遂げたということは、この上もない形でその想いを結果として示したことになる。東日本大震災を経て、被災地の大学で働く精神医学・メンタルヘルスの専門家として、自分に何ができるのかということはやはり自問を続けるところである。東日本大震災以降、震災以前からあった問題も含めて、精神医学・精神医療の領域での取り組むべき課題の多さを改めて感じさせられる。被災地の地域精神医療の担い手が少ないという問題。抑うつや心的外傷後ストレス反応を呈する人は多く、如何に軽減の方策を社会に浸透させ、問題を抱える人が有効に医療機関を利用できるかという問題。医療機関を受診した人により有効な診療を提供できる体制づくり。今後の大災害に備えての体制づくりも必要だ。また、精神医学を学術面で前進させることも大事な課題だ。復興に時間がかかること、人口動態の変化や原発問題が大きな影を落としていることなども含め、一筋縄ではいかない問題も多いが、できることから課題のひとつひとつ取り組んでいこうという気持ちを新たにさせられる。

震災からの医療・保健の復興への取り組みについて困難な課題が多く残されている一方、ゲノム医療を含む最先端医療、電子化した医療情報の共有化や医療の地域連携などの新たな医療に向けた流れが活発になってきており、今後、医学、医療を取り巻く環境の変化のスピードは益々速まりそうである。精神医学、精神科医療を取り巻く環境のめまぐるしい変化の中で、精神医学、精神科医療に従事する者がどのようにリサーチマインド（探求心・研究心・好奇心）を育み、維持し、実現していくのかは重要な課題だ。精神神経学雑誌が今後益々、精神医学、精神科医療におけるリサーチマインドを活性化する存在となるとよいと思う。

富田博秋